54年にわたる世界結核対策

結核予防会に託された期待

2014年から「公益財団法人結核予防会」の理事長を務める工藤翔二氏と結核との関わりは、1972年から勤務した東京大学病院に結核病棟があったところから始まった。開業医だった祖父の影響で医師を目指し、重症喘息発作で父親を亡くしたため呼吸器の道を選んだという工藤氏は、大学紛争時期と重なった1967年に東京大学医学部を卒業。「患者さんに尽くすこと」が患者さんからの信頼と医師としての経験を得られる唯一の道だったという。医療法人大田病院を経て、東京大学病院に勤めだした頃には苦労を乗り越え、医師免許を取得し、呼吸内科医として新たな道を進み始めていた。

結核医療教育に携わるようになったのは、日本医科大学に赴任した1992年。同大学で呼吸器・感染・腫瘍部門の教授を務めていたとき、若い呼吸内科医が結核の治療を学ぶ機会がないため、外来や入院治療中の患者さんが結核を発症した際に、結核専門の医療機関に紹介することしかできない実態を目の当たりにした。そこで院長に掛け合い、全国の私立大学に先駆け、一般病棟で結核患者を診察できる「モデル病床」を病院内に設置。自身も結核教育を浸透させるべく講義を担当し、現在も継続している。

当時、びまん性肺疾患を専門分野とする一般呼吸器医療のパイオニアとして活躍する中、同級生であった森亨氏（結核研究会名誉所長）と石川信克氏（結核研究所所長）は結核医療で活躍していた。そのため、「いつからか2つの医療の橋渡しの役割をしなければならないという使命感が芽生えた」と言う工藤氏は、呼吸器学会を主な学術活動の場としながらも、「一般社団法人日本結核病学会」に入り、その役員を兼任するなど結核教育の活動を継続していた。そんな縁もあって、工藤氏が日本医科大学で定年を迎えようとしていた2008年に、「財団法人結核予防会複十字病院」の院長就任への誘いを受けた。森氏や石川氏に加え、かつての恩師や他の同級生からも強い要請を受けた工藤氏は、結核予防会複十字病院の院長に就任することになった。

院長を務めた6年間で病院の進むべき道を明確にしながら、病院経営の立て直しに尽力した。そして赴任3年目で赤字経営から脱することに成功。2007年に同病院が多剤耐性結核患者など治療が困難な患者さんを受け入れ、外来治療を担う「高度専門医療施設」の指定を厚生労働省より受けたことから、隣接する結核研究所と共に臨床と研究、そして人材育成に力を入れた。

現在も、アジア・アフリカを中心に年間1，040万人が結核を発病しており、日本の結核対策も国際化が求められるようになった。「公益財団法人結核予防会」は1963年から国際結核研修を開始し、その受講者は世界97ヶ国から2，317人（2016年6月）に達し、世界的に高く評価を受けている。同会の理事長となった工藤氏には、54年間培われたその活動の発展が託されている。

■結核対策コースでの講義風景

■国際研修卒業生の集い（2015年12月UNIONケープタウンにて）

工藤（くどう） 翔二（しょうじ） Shoji Kudoh
公益財団法人 結核予防会 理事長
Chairman, Board of Directors,
Japan Anti-Tuberculosis Association

1967年 東京大学医学部卒業。東京大学第三内科、都市駒込病院を経て、1994年日本医科大学医学部（呼吸器・感染・腫瘍部門）主任教授。2008年日本医科大学名誉教授、財団法人結核予防会複十字病院院長。2014年に公益財団法人結核予防会理事長に就任。びまん性汎細気管支炎（DPB）に対する「マクロライド少量長期投与療法」を確立した呼吸器内科のパイオニア。特発性間質性肺炎の診断基準改訂と、病態解明、びまん性汎細気管支炎の遺伝性要因の解明、COPDの普及啓発を行うなど、呼吸器疾患の治療に欠かせない功績を残している。

推薦者
木下 幸子
公益社団法人 全国結核予防婦人団体連絡協議会 会長

今村 聡
公益社団法人 日本医師会 副会長

武見 敬三
参議院議員

教育者部門 受賞者 工藤 翔二